〈書評論文〉

ジャカルタにおける都市生活の基層
―― 関係性創出の実践と都市全体への参画 ――

AbdouMaliq Simone,
Jakarta: Drawing the City Near
(University of Minnesota Press, 2014)

中　村　昇　平

はじめに

近年、新自由主義的政策が推進する政治経済の再編によって、貧困層を中心とした都市住民の権利は以前にもまして脅かされている。資本主義の原理に沿って産業化される都市空間において顕在化した住民の「都市への権利」の問題を論じたH. Lefebvreの議論を嚆矢とする人文地理学・社会学における都市研究は、こうした状況の中で住民の権利を拡大する可能性について論じてきた（Castells 1977; Lefebvre 1991; Harvey 2008）。都市の日常生活は、人間や習慣、制度、空間、物質が複雑に絡まりあって関係し合う局面で営まれる。一般に「南側世界」に位置付けられるインドネシア共和国の首都ジャカルタでも、共通する基盤をほとんどもたない多様で異質な背景を持つ人々がある種の近接性の中に生活を営むという状況がみられる。人々が生活上のリスクを軽減して持続的に暮らしを営むためには、自身を取り巻く範囲に存在・生起する様々な人的・物質的アクターの配置や編成を把握するよう努め、慣れ親しんだ社会的編成を改変・更新するようなアクター間の関係性を創出し続けることを求められる。

本書の著者であるSimoneは、ダカール（セネガル）、ヨハネスブルグ（南アフリカ）をはじめとするアフリカ諸都市を研究してきた社会学者であり、近年はジャカルタを主なフィールドとして調査を行っている（Simone 2009）。本書は、既存の都市研究の議論を土

台としながらも、マクロな政策的観点から都市の全体像を捉える視点 *telescopic urbanism*（Amin 2013）を拒絶する。フォーマルな制度や機構を通して住民に活用可能な資源を分配する方法を模索するよりも、日常生活世界における小規模な社会・経済的営為に身を投じる過程で大きな物質的・政治的資源の流れに自身を接続させようと企図する住民のミクロな実践に焦点をあてる。本書の試みは、都市全体を特徴づける性格をこうした日常実践への考察から直接導き出そうとするところにある。本書は序章 *Rehearsal for an Urban Commons in Jakarta*、終章 *Reimagining a Commons* とそれにはさまれた５つの章からなる。以下では章ごとに順を追って内容を紹介した後、本書の意義について論じる。

1　南側世界と先進国における社会状況の相似性

１章、*The Near-South: Between Megablock and Slum* で著者は、*near-South* という概念を提起する。この概念はまず、先進国と南側世界 *global South* の都市とを分け、低開発状態に止まる後者が前者に追いつくよう発展している途上であるという従来の捉え方は既に現状認識としては適切でないという前提から出発する。社会的不平等、空間的分断、経済の歪み、インフラや社会福祉の欠如といった諸条件に直面しながら、都市住民の生活は現実としてその持続性を失ってはいない。その事実自体が驚くべきことではあるが、それらの制約条件が都市全体の持続性を直接脅かすのではないとすれば、こうした社会状況が南半球の都市の性格を規定しているのではないと著者は主張する。「グローバル資本主義によって構築される惑星規模の都市化の過程」（p. 32）における課題に様々な仕方で対応していく中で結果として北半球でも南半球でも類似した状況がもたらされるという点に注目すれば、北側世界・南側世界の両者における大都市がこうした社会状況（*near-South*）に直面しており、住民は等しくその影響力への対処を求められていると言える。

2　都市のマジョリティ

２章、*The Urban Majority: Improvised Livelihoods in Mixed-up Districts* では、中流階層・低階層の別に拘らず、雑多な人口構成の只中に生活を営む都市住民、すなわち都市のマジョリティが、直近の社会状況に注意を傾け続け、そこで何が起こっているのかを絶えず「目撃 *witnessing*」（pp. 149-50）していなければいけない状況に生きていることを説明する。ここで著者がいう「目撃」とは、目の前で起こる状況を早急に断定的に解釈することを避けて異なる理解の可能性を常に考慮に入れながら現状を分析し続け、次に何が起

こるのかを注視し続けるという実践のことである。

例えば、麻薬取引の蔓延等を背景として暴力沙汰が頻繁に起こるある地区では、地区内の揉め事 *tawuran* の解決の為に住民同士の会合をもつが、そこでは個別の問題に言及して具体的な解決策が話し合われることはないという。そもそも揉め事の背景となる利害関係が複雑すぎる上に、生活上の必要から避けることのできない側面を多分に含んでいるために、また、個別の揉め事に関わる利害関係が長期化・固定化することは少なく、短期で収束する性格をもつために、そうした試みは実効的な対策たりえないという事情がある。しかしながら著者は、こうした会合が揉め事に対する地域の取り組みという名目で行われ、そこにおいて様々な属性の住民がそれぞれの属性に応じた役割を演じ、各アクターの地区内における役割構成が提示されることで、各人が役割に応じた多様な対応を取りうることを確認する場となっていることこそに意味があると指摘する（pp. 128-30）。

こうした地区では、属性や役割の差異が織り成す複雑性が理解しきれない問題のまま据え置かれる。例えばエスニシティの属性をみれば、ある地区に数世代に渡って居住し出自の地方に帰るつもりの毛頭ない人々でも頑なに自身をジャカルタ土着のエスニシティ（ブタウィ *Betawi*）とは見なさないことが常である（pp. 136-7）。しかし、出自に関する属性がそのように温存されてはいても、そうした属性の温存は生活の仕方に何らの固定も硬直ももたらさない。住民が差異を温存するのは、雑多なアクターが近接性の中に重なり合う異種混交状況であるからこそ絶えず生じる創造・刷新への接続可能性を温存しておくためなのである。属性の差異を温存することはステレオタイプを通して生き方を縛るのではなく、相互干渉の回避を通して個人の生活戦略の可能性を確保し、差異が近接する生活空間における包摂性を担保していると著者は述べる（pp. 134-9）。

3　関係性の創出

3章、*Devising Relations: Markets, Streets, Households, and Workshops* では、多様な人々が都市でどのように関係性を創出していくかを説明する。都市には、人や物を惹きつける場所がある。南ジャカルタのクバヨラン市場 *Pasar Kebayoran* は、千以上の露店が集積する市場である。寝巻きに身を包んだ家族連れが、ごく少量の肉や果物を買うためだけにわざわざ、バイクに3人、4人とまたがって夜明け前に市場を訪れる。零細な小売業者を取り巻いて様々なインフォーマル・セクターのビジネスが入り組んで行われるこのパサールがこうして人を惹きつけるのは、単に経済的合理性によるものだけではないと著者はいう。様々な業務が多角的に営まれる空間で、人はなにかしらの驚きや、予期せざるものを

求めて集まるのだという（pp. 154-8）。

近接性の中に引き込まれた人や物の間には、集まるということのみによって特定の関係性が生まれるわけではない。どのような関係性が生まれるのかは完全な偶発性においてしか捉えることができない（pp. 160-1）。人がこれらに働きかけを行うことで、それまでに関連しなかったものを結びつけていく作業が必要となる。物事を見る角度をずらし、新しい視点でこれまでにつながっていなかった物事や人々を繋げることで、内と外を隔てる関係性の境界も変化する。こうして予期しなかった新しい関係性の中に参画していくことを通して、何か自分たちより大きなものに参画しているという感覚を得るために人が集まり、そこに物も集積するのだと著者はいう。

新自由主義の浸透がもたらす資本蓄積の論理は、都市経済の中心部における開発を方向づけ、分断され均質化された空間を作り出していく。大規模な資本の投入によって仕事・住居・余暇が計画的に配備された、巨大モールや高層マンションなどのメガ・コンプレックスに特徴付けられる都心部の開発は、その開発の軌跡が読みやすい。しかしながら、その計画が行き届かない開発計画の周縁部における空間の配置は極めて予測不可能で、不確定性を大いに残している。上流階層向けのゲーテッド・コミュニティの開発は郊外部まで進展しているが、その合間には統制の行き届かない地域が多く残されている。こうした隙間は郊外だけでなく、都心部にも多く残っている。都市の隙間で、多様なアクターとの近接性の中に引き込まれた人々は、軌跡の読めない周囲の状況に慎重に気を配り、常に変化する環境の中でそれまでには想像もされなかった関係性を紡ぎ出し、新しい生活の形を作り続けていく。その絶え間ない繰り返しによって都市は異種混交的な空間であり続ける。都市住民が創出する現実は、都市のあり方を大々的に刷新するものとして、あるいは大規模開発への明確な抵抗として現れてくるのではない、と著者は言う（p. 167）。新しい関係性が紡ぎ出される土壌は都市生活の底流 *undercurrent* にあり続け、新自由主義の浸透を迂回させ、屈折させ、取り込み続けている。

ジャカルタにおける服飾産業の一大集積地であるタナ・アバン *Tanah Abang* 近辺では、大規模な需要を賄わなければならないにも拘らず工場の規模は家内制手工業を中心とした小規模生産に支えられている。企業家は生産規模を拡大しようとはせず、頑なに各工程を外部委託し続ける。結果として、各々のビジネスの規模が小さいために新しい装飾やデザインの開発と販売が短期間で矢継ぎ早に行われる。そうした試行錯誤の中で売れるものが出てくれば、そこに集中的な資本投下が行われる。また、生産の大半がインフォーマルな領域で行われるために、末端では極めて低賃金で流動性の高い雇用形態がとられている。このことは、一時的流行のような短期需要や季節需要に合わせて効率的に労働力を投下で

きることを意味している。著者によれば、各工程を請け負う小規模生産者間においても雇用主と労働者の間においても長期的・安定的な業務契約・雇用契約が結ばれることはないという。ここでは、企業者間の関係や雇用主と労働者の関係を常に流動的なものに留めることが商品や事業戦略の継続的な刷新を促す基底要因となっている。裏を返せば、ビジネスの成り行きを規定する状況の不確定性が、逆に消費需要や雇用機会といった経済的機会を作り出しているといえる。もちろん、こうした状況の実際の展開は複雑であり、予測し難い。このシステムが実際に機能するのは、それぞれのアクターが周囲の状況に常に気を配り、状況の変化に適切に対応できる限りにおいてである（pp. 184-7）。

著者はさらに、中央ジャカルタ、タマン・サリ *Taman Sari* でバイクの部品販売・修理工のビジネスを家族経営で行っているある企業家の例を挙げて、こうした実践と都市全体との関係を論じている。この家族は、一箇所に大きな店舗をもつ代わりに、別々の場所に数店舗を開き、経営・会計・事業展開において別個の独立した経営体としてそれぞれの店舗を運営している。それぞれの店舗で、道を行き交う人々の動きを注視し、店頭にどの商品をどのような配置で並べればより売れ行きが良くなるのか、中古の部品と新品ではどちらにより需要があるのか、修理の需要はどの程度か、といった動向を敏感に察知し、対応していく。こうした動向は各店舗がおかれた環境により異なる。異なる立地に複数の観測点を確保することで、それぞれの場所で起こりうる異なる関係性のあり方に関わっていこうとする意図から、店舗を集積させるのではなく分散させている。こうした実践は、直近の社会環境の観察とそこで生成する社会関係への関与から、都市全体をとりまいて生起するより大きな動態に関与しようとする意欲の表れである。都市の住民は、身の回りの状況を「目撃」し、そこにおいて新たな関係性を作り出す営みを通じて、自らを都市全体へと接続していると著者はいう（pp. 188-91）。

4　生活の持続性と都市の持続性

4章、*Endurance: Risking the Familiar* で著者は、住民の生活と都市自体の持続性について論じる。著者の挙げた例の中に、大通りの歩道橋で寝泊まりしていた一人の男性の話がある。彼は、ある時から毎朝2時間歩道橋の上を掃除し始めた。表向きは無給の奉仕だったが、小銭を渡してくれる通行人もいた。治安も良くない場所なので、彼が夜間決まってそこにいるというだけのことを有り難がる人もいる。すぐ近くの仕事場からこの歩道橋を通って朝方帰宅するセックス・ワーカーたちとやがて顔見知りになった彼は、仲間と一緒にバイクで彼女たちを家に送り届けるビジネスを始めた。こうしてビジネスの規模を拡大

していった彼は、最終的にセックス・ワーカーたちの住む建物を購入することまでできたという（pp. 226-7）。

ジャカルタのように都市の運営が慢性的な機能不全を抱えている状況では、社会福祉の受け皿から漏れてしまう大量の住民が生活を維持できるということ自体が驚くべき事実である。都市生活の「持続性」は、著者によれば、人々が互いを発見し、関係を作り出すことができるかどうかにかかっている。階層も帰属も活動も多様な中で互いの存在に気付くことで、分断されていても互いを視覚の中に入れることができ、ある種の統一感が生じる。何らの共通性も前提とすることなく、近接性の中に並存することのみによって異なる視点に触れ合い、無関係なものを繋げる関係性を生み出す可能性が保持される。都市において、表面的状況把握は常に人の目を欺く。物乞いをするくらいしか金銭獲得の可能性がないと思えるような歩道橋の上にも、しばらく腰を据えて長期的に人や物の動向を注視していれば、思いもしないような経済的機会がみえてくる。このように、状況や視点の少しの変化によって、見えてくる可能性、生まれてくる関係性も大きく変化する。もともとは何の接点ももたない多様な背景をもつ住民が、それまでの知識や慣行に拘泥することなく状況の変化を常に考慮に入れ、それに柔軟に対応することで社会経済活動における複数性・重層性を受け入れ、そこに関与していく準備ができているということが、ジャカルタという都市全体の持続性をも担保していると著者はいう。

5　政策に創意を取り入れる

5章、*Inventive Policy: Integrating Residents into Running the City* で著者は、上にみたような都市の状況を考慮した上でとるべき政策について論じる。本書を通して著者が説明してきたように、ジャカルタの住民は、都市開発の隙間における限られた機略の可能性の中で、都市空間全体との接続性を確保しながら、身の回りの社会状況を操作改変してきた。そうした漸進的な取り組みは物理環境の改善や社会的弱者のケアの向上、雇用の創出を含めた様々な結果を生み出し続けている。こうした過程は、全ジャカルタ規模の「具体的な統一感」を生み出し、行政上の境界を越えるレベルで、また、いかなるフォーマルな機構や部門が担える範囲をもはるかに越えるレベルで進行している（p. 259）。効果的な政策を実施するためには、個々の具体的局面において、直近の社会関係への参与者を納得させるような革新的な現状認識と行動方針を物語として提示し続けなければならない。政治家や行政が直接現場を「目撃」し、コミュニケーションをとって、そこで何が起こっているのかを知った上で適切な政策を実行するか、あるいは、小規模なレベルで戦略・機略を

実行するための資金を（ベーシック・インカムなどの方法を通して）住民自身に委任する政策を実行することが、効果的な政策として著者が提起するものである（pp. 257-9）。

おわりに

以上みてきたように本書は、ジャカルタの都市空間における住民の生活実践が生み出す成果と、それを増進させうる政策方針について論じた。本書で事例として挙げられたジャカルタでは、行政による都市運営の効果が十分に行き届かない上、新自由主義の論理に侵食された大資本主導の都市開発が際限なく推進されていくという状況が典型的にみられる。しかし、行政や大資本の推進する予測可能で管理された開発の影響を強く受けながらも、その管理が行き届かない周縁の空間もまだ多く残っている。雑多な社会構成（建造環境や人間関係に現れる異種混交性）を強く示す都市空間の隙間で住民が絶えず創出する革新的な社会構成は、都市開発の中心領域にも侵食していく。

こうした状況（*near-South*）は、著者が第１章で論じたように、「南側世界」のみが直面する問題ではない。ジャカルタの人々は、直近の社会状況に注意を傾け続けることでこれを解釈し、その解釈に基づいて絶えず新しい物語を紡ぎ出すことを通して人と物の間に関係性を創出する。そうすることで人々は都市全体に参画し、その大きな流れに影響を与えることができる。著者が都市を全体的に眺める視点を拒絶して人々の日常におけるミクロな実践のみに着目しながらも、全体としての都市を論じることができるのはこの点においてである。周囲の社会状況を目撃し、関与することを通して都市全体と繋がろうとする住民の実践の中にこそ、著者は都市のコモンズを見出そうとしている。

市場原理主義に立脚する政治経済構造を根底的に疑うことなく、既存の枠組み内部においてのみ住民の「都市への権利」の拡大を論じる方向性の限界を指摘する声が近年高まっている（Harvey 2008）。Lefebvre の議論の核心はそもそも、都市空間の価値の根底を法的所有者にとっての市場的交換価値にではなく実質的居住者にとっての社会的使用価値に定め、人々が具体的に経験する空間 *lived space* を取り巻いて生起する社会的な繋がりに実際に参与する住民自身に空間の使用方針に関する決定権を移譲することによって、私的所有の制度に拠って立つ資本蓄積の原理に支配された都市空間使用のシステムを乗り越えることにあったはずである（Purcell 2014）。このことに鑑みれば、住民の権利拡大の議論の射程が、資本主義的原理に依拠した既存の社会構造内部における決定権の部分的な獲得に留まるものでないことは明白である。

こうした指摘を踏まえると、本書で提示された視点はより意義深いものとなる。本書の

基本的視座は、住民生活の持続性と都市全体の持続可能性を論じるにあたって、その可能性をフォーマルな機構が主導する上からの政策にではなく、生活空間における社会的編成を不断に創出・再編する過程で自身を都市全体へと接続することによって都市空間全体をコモンズへと変換する住民の生活実践にこそ見いだそうとするものであった。ここには、既存の社会構造の転換を経ることなく住民が都市の全体的動向に主導的な役割を果たしていくための一つの可能性が示されている。こうした観点に立てば、人々が日常実践する小規模ではあるが絶え間ない社会空間の再編こそが、都市の機能不全を補完し、新自由主義の侵食を無効化するために拠って立つべき基点となる。具体的局面で空間的規模をどのように設定するか、そこに決定権をもつべき住民の範囲をどのように設定するかといった実際的問題は本書において解決されていないが、住民と都市との関係をどのように捉えるべきかという基本的視座を明確に提示した点に本書の意義がある。本書に考察されたような社会関係再編の実践が都市生活の基層底流を成すのであれば、本書の知見はジャカルタや南側世界の都市のみに限らず広く示唆をもつものだといえる。

参考文献

Amin, Ash, 2013, “Telescopic Urbanism and the Poor,” *City*, 17 (4): 476-92.
Castells, Manuel, 1977, *The Urban Question: A Marxist Approach*, Cambridge, MA: MIT Press.
Harvey, David, 2008, “The Right to the City,” *New Left Review*, 53: 23-40.
Lefebvre, Henri, 1991, *The Production of Space*, Oxford: Blackwell.
Purcell, Mark, 2014, “Possible Worlds: Henri Lefebvre and the Right to the City,” *Journal of Urban Affairs*, 36 (1): 141-54.
Simone, AbdouMaliq, 2009, *City Life from Jakarta to Dakar: Movements at the Crossroads*, New York: Routledge.

（なかむら　しょうへい・博士後期課程）